

信 毎 歌 壇

米川 千嘉子 選

田に畑に育てし色を穫り入れる人々の影短日に濃し (佐久市) 三石 俊司
 午前二時「コーヒードリンク」と起き出した介護の
 日々父との思い出 (大田市) 小西 美恵
 瞬きのたびに深まりゆく秋にきらめきを足すよう
 なアイシャドウ (松本市) 飛 和
 寂しいと言わずに「居ればいいのに」と言葉染
 みたり転居近づく (上田市) 小林さよ子
 赤手鞆東京みやげをお揃いでつきし友遊く金木犀
 香る (千曲市) 倉石みつる
 永遠の五歳ですとうちコちゃんのようにありたい
 今日から五稀に (千曲市) 関 津和子
 月をみて上娘と電話せしこと思ふ十五夜の月今年
 は見えず (小諸市) 堀川 篤子
 壁落ちし土蔵裏にはひっそりと薬草になるつぼ
 草生ふ (中野市) 増田きみ江
 この角で雨をぶるぶる払つてたとき愛犬を想い出
 す路 (長野市) 松本 博人
 二十歳まで生きるも至難な十八の兵の日ありき今
 日九十八 (塩尻市) 丸山 健三
 佳作
 老夫婦値上げの店を一度回りわし等にも買へねど
 杖つき帰る (木曾町) 新村 亮三
 御嶽海意地の土番覇気見たし吾はテレビに声を荒
 げる (伊那市) 赤羽 正彦

選評

第一首、豊かにみのったさまざまな作物を刈り入れ、穫り入れて、田畑ががらんと寂しくなる。「色を穫り入れる」が巧み。第二首、父は昼夜逆転していたのだろう。大変だったことも今はただ懐かしい。第三首、春の色彩とはまた別の秋の美しさが作者のまなざしに映るよう。軽やかに季節を喜ぶ歌。第四首、長年親しんだ関係が思われる言い方だ。この歌が載るころには引越している作者。

小池 光 選

「野菊の墓」に涙せし夫逝きにけりおろかな妻を
 ひどり残して (長野市) 北沢 京子
 学校を嫌がる吾の手を引き共に歩みし母の面影
 幼き日分教場の体育は山にのぼりて暮ること
 (伊那市) 竹松 主裕
 夫の忌の団子作りを最後とし幾年使用の蒸し器を
 終つ (上田市) 小林さよ子
 これからも生ある限り歌詠まむ病床六尺子規を思
 えば (御代田町) 土屋 春雄
 「かはい」と言ひし言葉にふりむけば妻の手を
 ひく我のことなり (長野市) 丸山 祐司
 われよりも長く生きよとときたまに思ふことあり
 犬を撫でつつ (長野市) 原田 浩生
 夕暮れはやがて満天の星となり大いなるものに喚
 ばるるごとし (長野市) 近藤 光子
 わが短歌の載らぬ歌壇はさみしいと励ましてくれし
 友の亡き秋 (佐久市) 白田宇多子
 紅葉は花木より始まってひたりひたりと山を染
 めゆく (茅野市) 三好 碧
 佳作
 寡黙なる亡父がキセルを熨らせてフツと笑ふが
 嬉しかりし日よ (須坂市) 高橋 都子
 友からの励ましの文うれしくて何回も読む秋の夜
 長だ (長野市) 峯村 玲子

選評

第一首、自分のことを「おろかな妻」となかなか言えない。言うには勇気が必要である。作者にはそれがある。「野菊の墓」との配合もよい。秀逸な作。第二首、むかしでも学校に行きたくない子供はい

小島 なお 選

メロディーが好きで聴いてたP.M今夜は辞書を
 引きながら聴く (松本市) 川村 聡子
 夕暮れの電車に乗りて窓見ればスマホの人等闇に
 流れる (大田市) 小西 美恵
 秋くれば仏壇の夫に菊をそえて私の愚痴も菊の香に
 消ゆ (岡谷市) 土用 慧
 朝起きて思い描いた秋の薔薇 夜には心の中で萎
 れる (東御市) 広沢里枝子
 草花の立ち枯るる雨の八幡平トリカブトの青独り
 勝ちなり (岡谷市) 山岡 はな
 作業着しか知らぬ課長がスリットのスカートから
 かう演歌の思い出 (千曲市) 関 津和子
 健診で腹部に映る糸屑様僅か7ミリで夜も眠れず
 リフォームの部屋には少し不似合いの亡母の好み
 しレットロのガラス戸 (秦皇村) 松島 房子
 上空も穏やかなるや病棟の窓より見ゆる綿雲やさ
 し (麻績村) 塚原ふじ子
 気をつけよと常に思ふも今日もまた炬燵布団につ
 ますき転ぶ (松本市) 倉科美恵子
 佳作
 高齢者コロナワクチン七回目接種会場みんな和や
 か (長野市) 小林 操
 「よいこと」と認知症の父ボソリ言ふ「トイレ行
 くのも仕事です」と (松本市) 中村 博穂

選評

第一首、1960年代のフォークトリオ、ピーター・ポール&マリー。爽やかな曲調と反戦の歌詞。今あらためて切実な時代の局面を迎えている。第二首、誰も窓の夕暮れを見ていない。卓抜な結句の表現は